

105 「海外旅行の思い出（2）」

（15）グアテマラ[1995. 04. 29～05. 07]

家族4人でのグアテマラ行きのきっかけは、あの阪神大震災である。

1994年1月17日早朝に発生した大地震は、阪神地方に大きな被害をもたらした。

この時、家族は兵庫県西宮市の会社社宅に住み、水、電気、ガスなどのインフラ被害で生活に支障が出ていた。小学校は校舎の損傷がひどく、改修工事のため閉鎖され、授業はいつ再開されるかわからない。妻は子供2人を連れて、長崎の実兄の家にお世話になることになった。

私は仕事がありここを離れるわけにいかないで、家族離れ離れに生活せざるを得ない。その間、子供たちは約1ヶ月、長崎市内の学校に通うことになった。その長崎で、妻がグレンダと知り合うことになったのがそもそもの始まりである。

グレンダ・マルティネスは、長崎大学医学部に研修に来ていたグアテマラ出身の女性、医者のお嬢である。長崎大学には、日本で唯一の熱帯医学研究所がある。グレンダは、日本で熱帯医学を勉強してグアテマラに帰って専門医を目指している。この縁がきっかけとなり、家族でグアテマラに行くことになった。グアテマラでは、全面的にグレンダの家族にお世話になった。

① タイ航空でロサンゼルスに到着。せっかくロサンゼルスなので、夜の出発までの時間、子供たちが楽しみにしていたディズニーランドに行った。トランジットのわずかな時間だったが、ディズニーランドの雰囲気を楽しむことができた。

② グアテマラ・シティでは、グレンダの両親（父：マウロ、母：ロメリア）の家にお世話になった。夜行便で早朝に到着し、しばらく仮眠させてもらった。

午後3時頃、グレンダの姉パトリシア、その夫のマリオと子供のネナが来て、アンティグアに連れて行ってくれた。アンティグアはグアテマラ・シティから約50km、車で1時間ほどのところにある古都。以前首都だったが、1773年の大地震で首都遷都を余儀なくされた。

アンティグアは、石畳の道路で落ち着いたたたずまいの古都だった。由緒ある「ホテル・ポサーダ・デ・ドン・ロドリゴ」のレストランで、マリンバの生演奏を聴きながら食事を楽しんだ。



パトリシアとマリオ

③ 我々家族4人とマリオとネナ、ロメリアの7人でアティトラン湖に向かう。運転手はマリオ、カロークラスの小さな車に7人がすし詰状態で乗り込んだ。

アティトラン湖へは1本道で、坂道を遅い車を追い越しながら進む。途中のチマルテナンゴという町を過ぎて1時間半、合計2時間半ほどで視界が開け、アティトラン湖を高所から望む展望台に到着。

右から、海拔3000メートル級のサンペドロ山、トリマン山、アティトラン山が見える。

残念なことに山の頂上は雲に覆われていた。雲がなければ素晴らしい景色が拝めるはずだが、残念ながら山頂を見ることはできなかった。地形と温度・湿度の関係で、午後になると雲が出て山の姿は見られないことが多いのだそうだ。

それでも、湖と山の調和した景色はとても美しく“神秘の湖”という言葉がぴったり、『世界一美しい湖』と言われるのが頷ける。

湖畔の村パナハチェルから遊覧船に乗った。船は約1時間で湖を周遊し元の場所に戻る。美しい山の姿を船から見る事ができるはずだったが、さっきよりさらに雲が厚くかかり、ほとんど見ることはできなかった。くっきりと全体を見ることができれば、さぞ素晴らしかっただろうと思うと本当に残念！船の中では思い思いに写真を撮ったり話したりして、現地の人々と楽しんだ。



アティラン湖全景

- ④ グアテマラからカリブ海のロアタン島に行く予定だったが、その玄関口となる、ホンジュラスのサンペドロ・スーラまでの飛行機の時刻を間違え、結局行くことができなくなってしまった。

代わりにマリオの勧めで、太平洋側のプエルト・サンホセの海岸に行くことになった。バスは悪路を、物凄いエンジン音と排気ガスを撒き散らしながら、太平洋側へと向かう。徐々に標高が下がると湿気が増し、道路の両側は熱帯のジャングルに変わった。走る約2時間半プエルト・サンホセに到着。マリオに教えてもらった Hotel Posada Quetzal (ホテル ポサーダ ケツァール) を目指す。いかにも南国のリゾート・ホテルという雰囲気。部屋はコテージ風で、海に面して一部屋に6つのベッド、プール付きで豪華。

太陽は真上からカンカン照りで、少し歩くだけで汗だくになる。海岸はとても美しいが波が高く、海に入るのは危険。子供たちは浜辺で砂遊びをしたり、ホテルのプールで過ごす。ホテル敷地は広く、くまなく設置されたスピーカーから、耳が張り裂けんばかりのボリュームでサルサやクンビアのリズムが流れ騒々しい。もう少しボリュームを下げて欲しいところ。

プールサイドで、グアテマラ市内から日帰りで来たという、医師の4人家族と話した。ご主人のレネは太った腹で、食事モリモリという感じのエネルギッシュな人。4歳と2歳の男の子が、落ち着きなく傍でふざけ合っている。両親とも医者であり、グアテマラの上流階級の家族だろう。

夜、8時頃には音楽が止み静かになる。すると、押し寄せる波の音が急に大きな音で聞こえてくる。この自然の波の音のほうはずっといい。音楽が止んだ後の爽やかな波音は、はるばると遠くに来ていることを感じさせてくれた。ホテルで一日半、ゆったりと贅沢な時間を過ごすことができた。



プエルト サンホセの海岸

- ⑤ 日本に帰る前日、ロメリア、マリオとパトリシアとネナ、我々家族4人で、いろいろな思い出話をし

ながら、1時間半ゆっくりお別れの食事をした。

ホテルに戻り子供たちは部屋でテレビ、我々5人はラウンジでコーヒーを飲みながら話の続きをした。みんな打ち解けてとてもいい雰囲気。いよいよ別れの時が来て、短い期間だったがとても親しくなり、また逢えたらいいねと名残を惜しんだ。

(16) 韓国・ソウル[1995. 08. 16~08. 20]

家族4人と、グレンダを連れてソウルに行った。グアテマラでは、グレンダの両親や姉夫婦にとってもお世話になった。そのお礼を兼ねて、グレンダを韓国に連れて行ったのである。

ロッテワールド、ソウル・タワー、景福宮、昌徳宮、明洞、東大門など、グレンダ中心に子供たちも楽しめる観光地を中心に見て歩いた。

(17) タイ[1995. 12. 29~01. 07]

ここ数年、海外旅行に行く頻度が多くなった。いずれも年末・年始、夏休み、ゴールデンウィークの期間いずれかである。この年末年始の休みは、家族揃ってタイに行った。

バンコクでは、ワット・プラケオ、ワット・アルンなどの寺院、ジム・トンプソンの家（タイ・シルクで成功）など観光スポットを回った。バンコクで数日過ごし、その後、バスでバンコクの南にあるリゾート、ホアヒンというところに行った。ホアヒンはバンコクからバスで3時間ほどの距離にある。

ホアヒンでは、ロイヤル・ガーデン・リゾートというホテルに宿泊。名前のとおりリゾートホテルで、ヨーロッパから来た人で占領されてしまった感じ。多くの客が北ヨーロッパから来た人のようで、プールサイドでのんびりと時間を過ごしている。欧米の人々は、寒い冬のシーズンは南国のリゾートに憧れるのだろう。

(18) コロンビア[1996. 04. 27~05. 06]

いつかは行きたいと思っていたコロンビア、それがやっと実現した。

休みは10日間しかないが、せっかく行くのだから、少し足を延ばしてエクアドルのキートにも行ってみたい。ルートは次のように決めた

大阪→(ロサンゼルス)→(メキシコシティ)→ボゴタ→キート→ボゴタ→サンタマルタ→カルタヘナ→ボゴタ→(メキシコシティ)→(ロサンゼルス)→大阪

① アビアンカ航空 ロサンゼルス発ボゴタ行きの出発が3時間半も遅れた。この便はメキシコシティで給油後ボゴタに向かうが、時間遅れをほとんど取り戻すことができなかった。

ボゴタには3時間15分遅れ、午前9時30分に到着。ボゴタで3時間の余裕があり、その間にキート行きの航空券を買えばよいと考えていたが甘かった。キート行きは9時45分発だから、とても間に合わない。ターミナルでどうしようかと考えていると、とっくに行ってしまったと思っていたキート行きの搭乗案内放送が流れた。案内表示を見ると、何と！出発時刻が2時間も遅れて11時45分に変更になっている。これなら間に合う、何とか乗ろうと大急ぎでチケットをエンドースしようとしたが断られ、結局この便には乗ることはできなかった。こんなことなら、到着した時点で手続きをしていれば充分間に合っていたのに残念！

南米のフライトは2, 3時間の遅れは日常のこと。事前に航空券を買わなかったのは迂闊だった。

結局、キートへは予定より6時間以上遅く16時18分の便となってしまった。

- ② キートは標高2850mにあるエクアドルの首都。

国の中央を赤道が通る赤道直下の国だが、キートは標高が高いため常春の気候で過ごしやすい。

キートでは、まず赤道記念碑を観に行く。記念碑は市の中心から北に車で40分ほどのところにある。

赤道記念碑は思ったより大きく、立派なモニュメントだった。高さ30m、その上に直径5メートルほどの大きな球が載っている。0度0分0秒の位置に、東西方向の赤い線が引かれている。観光客は皆この赤い線をまたいで写真を撮るのがお決まり。北半球と南半球を跨いでいるという証拠写真となる。



赤道記念碑全景

- ③ キートからアンバート行きバスに乗り、パンアメリカン・ハイウェイを南下する。途中6000m級の雄大な山が見えるはずだが、あいにく雲が多く山の姿を見るのは難しそうだ。

道路の両側は緑の高原、点々と牛がのんびりと草を食べている。雲が厚く、目的のコトパクシ山やチンボラソ山の姿はとても望めそうもないので、予定変更し途中のラタクンガという、キートから2時間ほどの町で下車。清流が流れる、落ち着いたたたずまいの町をブラブラ散歩し、昼食を食べしばらく過ごしてキートへの帰途についた。

キートに戻り、中心街の独立広場やカテドラル、パネシージョの丘などを観て歩いた。

キートは丘が多く、とても活気のある街。治安はそれほど悪くない。周りを高い山に囲まれ、いつも秋風のような爽やかな風が通り抜けて行く。キートでは白人の姿はほとんど見なかった。黒人は白人よりさらに少なそうで、人口のほとんどがメステイソだと思われる。実際に来てみると、治安が良く爽やかでとても過ごしやすい街だった。



独立広場

- ④ ボゴタは標高2600mに位置する高原の街、南米有数の大都会だ。高層ビルが建ち並ぶ新市街と、スペイン統治時代の面影が残る旧市街とに分かれ、商業と史跡の街として知られるが、悪いことに暴力の街・恐怖の街としても有名になってしまった。

ポリバル広場に面した国会議事堂



ボゴタの中心街セプティマ大通り周辺を散策する。人通りが多くかなりの賑い、キートに比べて治安が悪いので注意が必要だ。

黄金博物館は、夥しい数の黄金(お面や装飾品など)が展示されその量に圧倒される。サンフランシスコ教会に入ると祭壇、天井はすべて金色に輝く凄さ!

セプティマ大通りを南に向かい、洋品店、銀行、両替屋、大きな書店などが並ぶ一郭を過ぎ、5、6分歩くと150m角ほどの、大きな石畳のポリバル広場に

出た。中央に英雄シモン・ボリーバルの像が建ち、周囲は国会議事堂、市庁舎、最高裁判所、カテドラルに囲まれ、大道芸人の周りには人だかりができています。最高裁判所の建物の一部に、ゲリラとの銃撃戦による銃弾の跡が生々しく残っている。このボリーバル広場からさらに南にいくと、治安の悪い地域に入るといふことで行くのは止めることにした。

- ⑤ ボゴタからバスで1時間と少し「シパキラ」の町に、サリーナスという「塩の教会」がある。

塩の採掘鉱だった洞内に教会を作ったもので、壮大な規模である。洞窟内は真っ暗で時々ランプの光があるだけ。祭壇に彫り込まれた十字架が、間接照明により浮き上がり、文字通り地底の教会と呼ぶにふさわしい。同じグループで回っていた修道女たち、誰からともなく始まった賛美歌が、洞内に反響して驚くほど透明に聴こえたのが印象的だった。

- ⑥ ボゴタを飛び立った飛行機は、高原の青々とした牧草地帯、続いて低木がまばらに生える平地、最後に沼地と熱帯林の密生した地帯を飛ぶ。徐々に高度が下り着陸直前、丸い大きな潟が見えその先にカリブ海が見えてくる。陸と海の境、変化に富んだ景色を充分楽しませ、飛行機はサンタマルタ空港に着陸した。



サンタマルタ(上空から)

サンタマルタの街は海に面し、コロニアル風の白い建物が続き目にまぶしい。街はそれほど大きくなく2、30分も歩くと街の輪郭は掴めた。ここはとにかく蒸し暑いところ、体の水分はすぐ汗になって出ていく。浜辺に出ると、たまたまそこにいた3人組(男2, 女1)のグループと話が弾んだ。外見から男2人は肉体労働者風、女の人は黒人で小柄、ビールを飲んでかなり酔っているらしく、発音のはっきりしない英語で話す。男のうちの1人は、ここから車で15分ほどの三菱の鉱山でカーボンを掘っているとのこと。手がグローブのように大きく、チャールズブロンソンを一回り大きくして、顔を少しくずしたような感じ。もう1人は兵隊と言っていた。

女の人は看護婦とのことだがどうだろう？

ブカラマンガという、ここから南東の山間の町の生まれだという。酒に相当酔っているらしく、何を言っているか良く分からない。この3人に加え、向かいのレストランの暇なウェイターと私の5人で、砂浜に面した木陰のいすに腰掛けて話した。

250CC入りの缶ビールを何本もあけ、空になった缶を道に並べ、日陰を追い移動しながら1時間半も長々と話をしたのが記憶に残っている。



- ⑦ サンタマルタからバスで次の目的地カルタヘナに向かった。

バスはしばらく広大なバナナ・プランテーションの中を走ると、次は荒涼とした地帯に入った。道路の両側にはまばらに低木が並び、干上がった沼のような水面が広がる風景がずっと続いた。

この道路はシエナガと balanquería を結ぶ、カリブ海にできた砂洲を貫く道路で、トロンカル・デル・カリベ(カリブ海のトランク)という名がついている。道路の形が、ちょうどトランクの“持

ち手”のような形をしているところから来た名前だろう。右側にカリブ海, 左側には点々と浅い水面。遠くに見えるのは、強烈な太陽を利用した塩田、何人かの人がけだるそうに働いている。

サンタマルタからバランキーリャまでは荒涼とした景色、ほとんど手つかずの自然がそのまま残っている。1時間半ほど走ると、遠くに高層ビルの並ぶバランキーリャの街が陽炎のように見えてきた。霞んで良く見えないがかなりの大都市。そしてビル群が次第に近づき、バスは街はずれのバスターミナルに到着。息つく暇もなく、カルタヘナ行きのバスに滑り込む。せっかくここまで来たのだから、バランキーリャの街を見たかったが残念！ここからバスは、低い灌木の密生する乾燥地帯を約2時間走りカルタヘナに到着した。

- ⑧ カルタヘナはコロンビア有数のリゾート地、国際会議も開催される。ホテルは、ボカ・グランデ（カリブ海に突き出た半島）のほぼ中央にあるホテル・カピーリャ・デル・マールに宿泊した。

ポパの修道院、サンフェリーペ城塞を見学した後、城壁に囲まれた旧市街を散策する。狭い路地がハチの巣のように縦横に走り、オレンジ、ピンク、黄色などに彩られたコロニアル風の建物が隙間なく続いている。建物が狭い道路に覆いかぶさり、直射日光が遮られ歩くには都合いい。

ホテルに戻り、プライベートビーチの天蓋付きベンチでくつろぐ。ここはガードマンの監視付で安心。太陽の光は強烈だが、空気は乾燥して涼しく、水はナマ温かく気持ちいい。

浜辺の客を目当てにいろいろ寄って来る。カキのような貝を目の前で剥いて見せ、レモンをかけて食べないか？モーターボートなどマリンスポーツはどうか？何か飲み物は？というのでオレンジジュースを注文。その間に黒人の大柄なおばさんがパイナップルはどう？次から次と来るのであまりのんびりできない。

ホテルに戻り、ウエルカムドリンクを飲み、21階の展望ラウンジへ。海岸線の形に添って街路灯がカーブを描き出し、夜景がとても美しい。ラム酒の水割りを2杯、カリブ海周辺ではウイスキーよりラム酒が一般的。ラウンジがゆっくり回転しているのがわかる。夜景を見ながらの一杯はとてもいい気分。

ボカグランデ地区は、警官が見張っているので夜の一人歩きもさほど危険ではない。ただし、警官の少ないセントロ地区の夜の一人歩きは危険。

ボゴタに比べればまだ治安は良いとは思うが、夜になると強盗に狙われる可能性がある。

- ⑨ ボゴタ→ロサンゼルス便の出国検査は異様に厳しかった。勿論、コカインの密輸に関して、アメリカがコロンビアに出国時の厳しいチェックを要求しているからである。

バッグの底の方まですべて調べられ、せっかくきれいに包んであるみやげも、一品一品開けてすべて調べられた。私の次に並んでいたコロンビア人の若い女性は、カップヌードルのようなものを



いくつも持っていたが、全部封を切られナイフで中を突き刺されていた。これでは食べられなくなってしまう。こんな感じの検査で、その厳しさは想像以上だった。一人一人の検査にかなりの時間がかかり、長い列がなかなか捌けない。そのため飛行機の出発がかなり遅れてしまった。

(19) 中米・キューバ[2001. 12. 15~01. 02]

30年目の勤年特別休暇で、家族とともに中米・キューバに行った。

今回のスケジュールは変則的である。私はできるだけピークシーズンを外して出発したい。それは航空運賃が安いこと、それと予約が入りやすいためだ。しかし子供たちは学校があるので、冬休みに入ってからでないと出発できない。そこで、妻と子供2人は1週間遅れで日本を出発し、メキシコで合流する計画にした。私はその間一人で中米を見て回る。ルートは、

東京→ロサンゼルス→(メキシコシティ)→サンホセ→テグシガルパ→サン・サルバドル→(グアテマラシティ)→メキシコシティ(家族と合流)→オアハカ→(メキシコシティ)→ハバナ→(メキシコシティ)→グアダラハラ→ロサンゼルス→東京

いろいろ行きたいところが多く、スケジュールはどうしても厳しくなってしまう。

- ① 夜遅くコスタリカ サンホセに到着。政情不安定な中米諸国の中で、唯一平穏な国。非武装、永世中立を宣言し、経済状況も中米で最も安定している。中米では唯一の白人国、美人の比率が高いことでも知られている。熱帯気候で珍しい動植物の宝庫。首都サンホセは海拔1,150m、常春気候の高原都市で近くに活火山があり、風光明媚なところ。教育レベルが比較的高く、人々はとても親切だ。日本ではあまりなじみがないが、ここはとてもいいところである。

サンホセ初日は、アレナル火山とタバコン・リゾートの現地ツアーに参加した。このツアーは、アレナル火山の麓に流れる川の温泉を楽しむ日帰りツアー。途中、カラフルな花柄模様の牛車「カレータ」で有名なサルチー村、サルセーロという高原の町の教会を見て昼食となった。

20名の客は1つのテーブルに座る。英語グループとスペイン語グループに自然とわかれ、私はスペイン語グループに入った。コロンビアのメデジンから来たという12人はとても陽気な人たちだった。毎日のように噴火しているという、アレナル山を半周ほどしたところで、タバコン温泉リゾートに到着。美しい熱帯の花が咲き乱れ、温泉の湯気があたり一面に立ち昇っている。



タバコン温泉

ここでは老若男女、湯の滝に打たれたり、ゆったりと湯の池に浸かったり思い思いにくつろぐ。

湯温がとても高く、しばらく湯に浸かりキリッと冷たい外の空気で体を冷やす。川の流れは速く、これがすべて熱いお湯なのだから驚く。一度流れ去ったお湯は二度と戻らないのだから、その湯量はすごいものだ。火山の果てしないエネルギーを感じる。

徐々に暗くなり、外灯の明かりがほんのり湯気に霞んで幻想的な雰囲気。

2時間ほど温泉で過ごし夕食の時間になった。コロンビアの人たちとはすっかり仲良くなり、和気藹々と豪華なバイキングを堪能、とても楽しい時間を過ごした。

翌日、路線バスでサンホセから南へ20 kmほどのカルタゴという町に行ってみた。

マーケットでセビーチェ（魚介と野菜のマリネ）を食べていると、店に入って来たおばさんが、トルトゥーガ（海がめ）の卵を飲み、セビーチェの持ち帰りを注文。それを見てちょっと試してみようと、トルトゥーガの卵をもらった。塩を少しふりかけて飲む。トリの卵に比べてかなりコシが強く、白身の部分が口の中で少し残ったが、味はトリ卵と変わらなかった。

- ② ホテルは前回10年前に来たときと同じ、最も賑やかなグランビア通りのホテルにした。

グランビアを東の方向に歩いてみる。ずっと歩いていくと、メルカードセントラル（中央市場）があるはずだ。4ブロックほど行ったところで、見覚えのある広場があった。10年前とほとんど変わっていない。すぐ横の角に花屋さんがあって、ベンチもあのときのまままったく変わっていない。もう1ブロック行くと、やはり10年前の姿と全く変わらないメルカードセントラルがあった。

このグランビアには4、5組の「物乞い」がいた。それぞれが何となく「なわばり」を持っているようだ。カラオケを流しマイクで歌を唄う盲目の男、彼は毎日見かけた。とても美声の持ち主。

もう一組は老夫婦、夫はギターを弾き夫人は手を添えている。夫人は目が見えないようで、片方の手に空き缶を持ち道行く人にさし出している。

道路の中央にあるプランターに寄りかかって、袖で顔を覆いながら、ただ空き缶を持っているヨボヨボの小さなおばあさん、その姿は哀れでとても見てもらえない。ほとんどお金はもらえていないようだし、炎天下に何時間もいて大丈夫なのだろうか？と心配になる。

それでも、みんな結構たくましく生き抜いているのに胸打たれる。

マックで道行く人を見ながら時間を過ごす。肌の色は真っ白から、徐々に黒くなっていき、かなり黒い色まで実にさまざま。男の顔もさまざま。白人系の端正な顔立ちから、チンピラ風の顔、黒人と白人のちょうど中間でごつい感じの顔まで、これまた本当にいろいろいる。混血がすすんで、いろいろな組み合わせでこうなったのだろうが、多種多様で見ていて実に興味深い。なんとなくパターン分けできるような気がするのだがどうだろうか？



サンホセ グランビア通り

- ③ 「ホンジュラス」ってどこにある？という人が多いと思う。

私は、どんな国か一度見てみたいという好奇心で行ってみた。

外務省の海外危険情報によれば、近年経済の悪化や都市部の人口増加などに伴って、治安がとても悪くなっている。中南米諸国の中では、コロンビア、エルサルバドルに次いで治安の悪い国とされている。特に国民に銃器が多く広まっていることから、銃器を使用した凶悪な犯罪が後を絶たない、とある。

コスタリカから来ると、ホンジュラスはかなり経済格差があるように感じた。

街を散策すると、中央公園は朝からものすごい人。公園全体がオープンマーケット状態で、大音響でカセットを鳴らす音、路上一面に宝くじを広げている者、衣類、菓子、花などありとあらゆる物が思い思いに売られている。人混みでは、スリには充分注意しなければならないことを意識する。

公園で、偶然隣にいた黒人の青年が親切にいろいろ教えてくれた。向こうから言い寄ってきたわけではないので信用し、彼に頼んでコマヤグエラにあるサン・イシドロ マーケットに連れていってもらった。外務省の海外危険情報では『コマヤグエラ地区は昼夜にかかわらず犯罪が多発している。スリ、ひったくりは日常茶飯事。夜間は殺人や強盗などの凶悪犯罪の発生率が高いので、単独での外出は勿論、たとえ車に乗っていてもこの地区への立ち入りは避けるべきである』とあった。それでも、怖いもの見たさで行ってみたいとなった。



テグシガルパの街並み

チョルテカ川に懸かる大きな橋を渡る。あたり一帯、ずっと露店が途切れることなく続いている。彼も、この辺りはスリが多いので注意なさいという。中央公園からサン・イシドロ マーケットの間は、まさに道路がゴミ箱という感じ。とにかく何でも道路に捨てる。



向こう側がコマヤグエラ地区

マーケットは2層構造になっていて暗く、奥の方は一人ではちょっと怖い感じ。入るとすぐにウサギや七面鳥を売っている一郭がある。七面鳥は足1本が紐でつながれていて放し飼いの状態、勿論食用。奥の方は肉屋、魚屋などが多く、屋台の食べ物屋もある。とにかく雑然、騒然としている。

途中目付きの良くない若者4、5名がたむろしていた。狙われて、言いがかりをつけられたりしたら、と考えると恐ろしい。

テグシガルパを歩いて、この街がとても大きな街であることを実感した。雑然とした旧市街から、新市街モラサン通りのレストラン、カフェ、ホテルやショッピングモールなどを見て歩いた。

バスで50分ほどのバジェ・デ・アンヘレス（天使の谷）は、山間のひなびた村でテグシガルパの喧騒を忘れることのできる静かなところだった。

- ④ ホンジュラスの次はエル・サルバドルに行った。首都サン・サルバドルのホテルはインターネットで予約した。着いてみると、街の中心からかなり離れたところだったが、家庭的なサービスでとてもリラックスできた。

朝食はホテルの中庭で食べる。庭は一面芝で覆われ、手の届くところにトロピカルの原色の花が咲いている。

朝から熱帯の強い太陽が照り付けるが、湿度が低い



サンサルバドル旧市街

のですがすがしくとてもいい気分。エル・サルバドルもどんな国か一度見てみたいという好奇心で来た。

サン・サルバドルは、テグシガルパよりさらに大きな街だった。めぼしい観光スポットは、プエルタ デル ディアブロ（悪魔の門）とサンアンドレス遺跡くらい。

プエルタ デル ディアブロは、小高い丘の上に飛び出した小さな岩山。頂上は直径5メートルほどの広さで、足元は岩がゴツゴツ出ていてとても躓きやすい。頂上はかなり風が強く、足元が悪いので、よほど注意しないと風の力で押され非常に危険。周囲の囲いは全くないの

で、風に押されてバランスをくずし、岩につまずき足を踏み外すと、もう奈落の底で一巻の終わり。ここでは何人も人が落ちて死んでいると聞いた。日本では決して許可されないと思われる危険な観光地である。ここからの眺めは絶景。東の方向にイロパング湖、南に太平洋、そして北の方向にはサンサルバドル火山の姿が見える。しばらく全方位の絶景を堪能して頂上を後にする。サンアンドレスに行く途中、1986年の大地震でがけ崩れが発生した場所を通り過ぎた。

サン アンドレス遺跡は、マヤ文明の遺跡で附属の施設、博物館がしっかり整備されていた。しかしピラミッドそのものは、上のかなりの部分がなくなってしまい、草で覆われメキシコのテオティウアカンとは比べようもないが、それでも壮麗なものであったろうことが想像できる。

高級住宅街を歩いていて、粹なファサードの銀行を見つけた。道路を渡り向かい側から写真を撮ろうとしてカメラを構えたら、ライフルを持ったガードマンに見つかってしまった。「こちらに來い」と手招きしている。

仕方ないので撮影を止めて、そのガードマンに怪しい者ではないことを説明する。これまで撮った数枚の写真をモニター画面で見せて、この銀行の写真は撮影していないことをわかってもらった。

この国では銀行は勿論、ちょっとした店舗の前にはライフルや拳銃を持ったガードマンが警備しているのが普通。塀の上部には鉄条網が張られ、強盗の襲撃に備えている。とにかく犯罪の多い国なのだ。その後、旧市街に戻り街を散策。中心街の道路という道路は露店で埋め尽くされている。テグシガルパとあまり変わらないが、道路にゴミは少ない。

中心部のバリオス広場、大聖堂、国立宮殿、国立劇場、リベルタドール広場など、街の主な施設を観て歩いた。

- ⑤ サンサルバドルからメキシコシティには19：20分に到着。空港で家族と合流することになっている。家族3人の乗った便は、時間どおりならロサンゼルスから20：00に到着する。

入国審査を終え税関を通り入国してしまうと、出迎えの人々で大混雑しているので、そこで家族を見つけるのは大変。税関のところで待つことにする。ここは必ず通過するので、間違いなく見つけられるだろう。でも、予定どおり飛行機に乗れたのだろうか、などいろいろな心配になる。



メトロポリタン大聖堂



サンアンドレス遺跡

うまく合流できなかつた場合を想定して、最後はホテルで落ち合うことに決めていたが、1 時間ほど待ち、税関のところに来た家族と合流することができた。フライトスケジュールが不確定な中南米で、予定どおり合流することができて本当に良かった。

⑥ メキシコシティから南に500 km、メキシコ南部の中心都市オアハカに行った。

ここに来た目的は、モンテアルバン遺跡を見るためである。モンテアルバンは、サポテカ人がオアハカの町を見下ろす高台に建設し、祭礼や儀式を行うための施設。紀元500～700年ころに最も栄え、マヤ文明が全盛期を迎える前に、中央アメリカで最も高度な文明だった。その後サポテカ人は去り、あとにやってきたミステカ人たちはここを埋葬の場とした。神殿の地下には多くの墓があり、そこからは金銀細工、ヒスイなどの財宝が発掘される。



モンテアルバン遺跡

モンテアルバン遺跡の規模は、想像していたよりずっと壮大なものだった。ピラミッドの上部がなくなっているが、そんなことはほとんど問題にならないほどのスケールの大きさ。高台にこれだけ広い平らな場所

を作るだけでも並大抵ではない。左右にピラミッド状の宮殿や球戯場が並び、入り口に近いほうから「北の大墳墓」ほぼ中央に「大神殿」奥に「南の大墳墓」がある。端にある北の大墳墓の上から俯瞰すると、もう一端の南の大墳墓は遥かかなたに見える。家族みんな、この規模の大きさに驚いた。子供たちの心にも強く印象付けられたに違いない。ここから見るオアハカの街の眺めも素晴らしい。

オアハカではこの他に、近郊の陶器の町「トラコルーラ」や樹齢2000年を超えるという、太った木「トゥーレの木」を見ることができた。

ホテル近くのソカロ（中央広場）で、クリスマスイブのイベントがあった。地区ごとに、いろいろ趣向を凝らした衣装でパレードの最中だった。飾り付けをしたトラックに着飾った子供たちを乗せ、10名ほどのブラスバンドが先導して、ソカロに乗り込んでくる。私たちのいた場所は、ちょうど次のソカロ入りの待機場所にあたり、子供の晴れ姿を、写真やビデオに収めようとする親たちでいっぱいだった。前の組が終わると、今度は自分たちの出番となり、ソカロを一周してパレードは終わる。ソカロ周辺は立錐の余地も無い状況で、人、人、人で埋まっていた。花火が何発も打ち上げられ、そのドーンという音が腹に染み渡るように鳴り響く。



ソカロのパレード

祭り気分は徐々に最高潮に達して来る。熱心なキリスト教徒の多いメキシコでは、クリスマスイブはこのようにしてお祝いするんだなあと改めて思った。

⑦ オアハカからメキシコシティ経由、キューバのハバナに向かった。アメリカからキューバへは行くことができない。空港での入国審査は念入りで、1人に10分ほどかかった。われわれ家族の並んだ列の審査官がととても厳しく、なかなか進まなかった。イミグレ窓口は個別ブースで、それぞれ1人ずつ入る。子供も1人ずつなので応援してやることができない。質問は、どこのホテルに泊まるのか、1人で来たのか、などごく一般的なものだったが何故か時間がかかった。子供は言葉ができない

ので、親と一緒にとお願いしたがだめだった。待っていると、子供たちはあっさりとOKになった。まあ、当然といえば当然だけれど。

市内に向かうタクシーは大柄な黒人の運転手だった。ホテル ベダードまでいくらか?と訊くと、メーターだからだいじょうぶだと。しかし動き出すとメーターがうまく作動せず、何度か停車してボンネットを開き調整した。太陽がさんさんと降りそそぐハバナを想像していたが、今日のハバナはどんより曇って陰鬱な天気だった。車から見るハバナの建物は、古くて汚れているなァーというのが第一印象。

- ⑧ カピトリオ(旧国会議事堂)は壮大な建物である。前面の丸柱の直径が1.5mはあると思われ、天井は非常に高い。前の大通りを渡って道路の向かい側からでも、カメラに収まらず分割して撮った。今は博物館になっているという。

1950年代のアメ車があるとガイドブックにあったが、これほどまでに多いとは思わなかった。すべて現役で活躍している。

ユーモラスな外観でとっても親しみが湧く。現代の車よりずっと人間に近い感じ。外側はかなり傷みが激しいが内部はきれい。歩いていると、葉巻はどうか?と何人も寄ってくるがすべて断る。

マレコン通りに出て、偶然見つけたムセオ デラ ムシカ(音楽博物館)に入ってみた。古い楽器などの展示とともに、キューバの黒人たちが、アフリカのどこから連れてこられたのか分かる地図があった。ピアノ、ギターなどの弦楽器、打楽器類の多さには驚く。

ロシアのパラライカやモンゴルの馬頭琴など世界の楽器も展示されていた。

マレコン通りは、なだらかにカーブした海岸線に沿った道路で街並みがとてもいい。今日は風が強く、波が防波堤を乗り越え道路に水しぶきがかかっている。不用意に歩いていると、水浸しになりそうだ。運河を挟んで、対岸にはモロ要塞が見える。こちら側のプンタ要塞では、修復工事が行われていた。さらに歩いて、ムセオ デラ レボルシオン(革命博物館)に入る。旧大統領官邸を博物館にしたもので、とても豪華な建物。展示室は、キューバ革命関係のもので埋めつくされている。銃、革命関係者の着ていた衣類、文書類、新聞記事など、ありとあらゆるものが小部屋に分けて展示されている。1階の展示室には、キューバ革命を終えたゲバラの、ボリビアに行った後の活動が紹介されていた。ここの入館料は、キューバ人が2ペソ、外国人が4ドルとかなり差があった。

- ⑨ ハバナの街は音楽で溢れている。広場やレストラン、ホテルのロビーなどいたる所でバンドが思い思いのスタイルで演奏している。その周りに人の輪ができ、みんなノリノリで踊っている。先天的なリズム感で根っから音楽を楽しんでいるという感じ。



カピトリオ(旧国会議事堂)



カピトリオ前に並ぶアメ車



マレコン通り

ホテルに戻ると、そこでも演奏しているグループがあった。白人男性3人、黒人女性1人の「アバネーロ ソン」というグループ。ボーカルの女性はとても声量があり、迫力のある歌を聞かせてくれた。トレス（3組の複弦を持つキューバ独特のギター）のテクニックが凄く、至近距離で聴いたので、その素晴らしさに引き込まれた。「キューバに来たんだなあー」と感慨深かった。

演奏が終わって、彼らと気軽に話すことができた。トレスの音のことや、コードの押さえ方を教えてくれたが、彼は左利きでわかりにくかった。できることなら、帰りにトレスを買って帰りたいくらい。このライブ演奏について、ホテルは場所を提供するだけ。彼らは客からのチップと、CDの売上だけが収入だという。思うように収入はなく生活は厳しいようだ。



サルサのグループ



ホテルのロビーでも

- ⑩ キューバの印象。安全で人懐っこく親切な人が多いのは、他の中南米諸国と異なる。土産物など、適正価格で表示され値段交渉は必要ない。タクシーはメーター付きで、乗る前に値段交渉しなくてすむ。メキシコでは、言い値の半額から交渉を始めるという具合で、慣れない日本人は値段交渉に疲れてしまう。

キューバの教育レベルの高さ、また、社会のありかたの違いを感じる。また、統計で発表されているより、黒人比率が高いように感じた。ミュージシャンは実力がありながら、競争が激しく生活はとても苦しいのが実情。彼らの音楽センス、レベルの高さには感心させられる。そんな彼らが、厳しい生活を余儀なくされる現実は何とかならないものだろうか。

- ⑪ ハバナからメキシコシティ経由、メキシコ第2の都市、北部のグアダラハラに行った。

グアダラハラに来たのは、Kさん家族と会うためである。Kさんは日系二世、日本女性と結婚し現在グアダラハラに住み、建設関係のコンサルタント会社で仕事をしている。ブエノスアイレスでは、彼のお父さんに大変お世話になった。

Kさん夫婦とは1994年に和歌山で会って以来、実に7ぶりの再会となる。その後、ロサンゼルスから手紙をもらってからは、ずっと連絡が途絶えていた。それがこの12月になって、グアダラハラから偶然手紙が届いたのである。メキシコ方面への旅行を計画していた我々にとって、ちょうどいいタイミングだった。さっそくメールでやり取りし、今日の再会が実現したというわけだ。

彼らは、和歌山からロサンゼルスに移り4年間、その後グアダラハラに来たという。

予約してくれたホテルにチェックイン、彼の家で日本食の夕食をご馳走になった。久しぶりの日本食で家族みんな大喜び。食後、7年間の積もる話、メキシコでの生活など話題は尽きなかった。

- ⑫ Kさんが、グアダラハラから250kmほど離れたグアナファトに案内してくれた。高速道路を飛ばして3時間、グアナファトは観光で有名な街。細く曲がりくねった道が続き、街全体が石畳で覆われた中世都市。街の中を流れていた水路を、今は道路として使っていて、狭い首都高速のようだ。高原の谷間に作られた街で土地が狭いせいか、隣り合った家と家は密着して建てられている。

夕食はステーキレストランに行った。Kさん一家3人、我々家族4人の大パーティとなった。食べている途中、マリアッチ楽団が、隣のグループのリクエストに応え、テーブルを取り囲むようにして曲を演奏した。

翌日、運転手付きのレンタカーを手配し、奥さんが同乗して近郊の街を案内してくれた。

家具と陶器の町トナラ。陶器の色付けは明るく、素朴な形が特徴でとても親しみやすい。

トラケパケはトナラより洗練された感じの街。富豪の邸宅を改造したレストランや土産物店、銀製品と同じ製法で造られるという赤色のガラスは、デザインも製造技術も優れた高級品。赤い色を出すために、錫を混入する必要がある体に良くないことから、職人のなり手がいないとのこと。色が心に残るとても印象的なグラスだ。

グアダラハラに戻り、中南米最大の規模を誇るというマーケットから、旧市庁舎に行った。この建物の1階から2階に上る階段の天井と壁には、グアダラハラが生んだ巨匠オロスコの『戦うイダルゴ神父』という迫力ある絵が描かれている。貧しく美術館に来ることのできない一般民衆に対して、独立のために立ち上がることを訴えた名画。この絵を天井や壁一面に描くためには、相当の体力と忍耐が必要だったはず。

70歳の画家にこの偉業をなさせたのは、強い使命感だったのだろう。初めてオロスコという画家を知った。

2日間、Kさん夫妻の厚意に甘え、すっかりお世話になった。本当にありがとう。

- ⑬ グアダラハラ発7時半の飛行機に乗るため、5時半までには空港に着かなくてはならない。ホテルでタクシーを呼んでもらおうとするが、まだ早すぎるととりあってくれない。仕方ないので、交差点で待ってみるが、外はまだ暗くタクシーはおろか一般の車も通らない。前日にタクシーを予約しておくべきだったと後悔してももう遅い。

しばらく二手に分かれてタクシーを探す。まったく来る気配がない。焦っていると、ちょうど巡回のパトカーが止まったので、警官に事情を説明してお願いした。こちらはもう必死。警官は無線でどこかのタクシーに連絡をとってくれたようだったが、10分待ってもタクシーは来なかった。

警官はここで待っていなさい(?)というようなことを言って、パトカーでどこかに行ってしまった。あー結局だめか? どうしたらよいのか、と途方にふけていると、何と! 5分ほどしてパトカーがタクシーを連れてきてくれた。連れてくるから待っていなさいということだったのだ。助かった! 飛行機に乗り遅れてしまったら大変。



マリアッチ楽団



トナラの陶器



戦うイダルゴ神父

親切な警官2人に最大限のお礼を言った。日本の警官がこのようなことをしてくれるだろうか？メキシコ最後の日に、とてもいい印象でこの国を離れることができ、さらに良い思い出を作ることができた。

- ⑭ ロサンゼルスで一泊、ユニバーサルスタジオで最後の一日を過ごした。帰るころには外は真っ暗になっていた。子供たちは大満足だったようだ。光のイルミネーションが輝く中、余韻を楽しみながら、ゆっくりと歩いてユニバーサルスタジオを後にした。



ユニバーサル スタジオ

(20) 韓国・ソウル[2008. 11. 07~11. 09]

会社で同期入社の子が、韓国の企業から招聘され再就職した。時々、韓国の彼から仕事上の質問を受け、調べて教えたりしていた。日本のノウハウが流出しないよう注意したことは言うまでもない。まあ、そんな問題になりそうな質問はなかった。その彼からソウルに来ないか？と誘いがあり行ってみた。

役員待遇で迎えられていたと思われる彼は、豪華な单身マンションに住み、運転手付きの車を自由に使える立場で羨ましかった。彼のマンションに泊めてもらい、夜ながながと積る話をした。

そして、行きつけの焼肉店や、踊りを観ながら宮廷料理を食べさせる店などに案内してくれた。お陰で観光旅行とは一味違った滞在ができた。もう1日は自由行動、地下鉄で1時間ほどの世界遺産 水原華城に行ってみた。(2021. 04. 27)